

監獄署の裏

永井荷風

青空文庫

われは病いをも死をも見る事を好まず、われより遠とおざけよ。

世のあらゆる醜みにくきものを。——『ヘツダ　ガブレール』
イブセン

——兄けい閣下

お手紙ありがとうございます。御ござ在ざいいます。無事帰朝しまして、もう四、五
カ月になります。しかし御ごぞん存ぞんじの通り、西洋へ行つてもこれと定さだま
つた職業は覚え、学位の肩書も取れず、取集めたものは芝居と

オペラと音楽会コンセールの番組プログラムに女芸人の寫真と裸体画はだかえばかり。年は已すでに三十歳になりますが、まだ家いえをなす訳わけにも行かないので、今だにぐずぐずと父が屋敷の一室に閉居しております。処いぢは市ヶ谷監獄署の裏手で、この近所では見付みつのやや大い門構え、高い樹木がこんもりと繁しげつていますから、近辺で父の名前をお聞きになれば、直すぐにそれと分りましたよう。

私は当分、何なんにもせず、此処ここにこうしているより仕様がありません。一生涯こうしているのかも知れません。しかし、この境遇は私に取っては別に意外というほどの事ではない。日本に帰つたらどうして暮そうかという問題は、万事を忘れて音楽を聴いている最さい中ちゆう、恋人の接吻せつぶんに酔えっている最中、若葉かげの蔭からせ

エ又河の夕暮を眺めている最中にも、絶えず自分の心に浮んで来た。散々に自分の心を悩なやました久しい古い問題です。私は白状します。意気地いくじのない私が案外にあれほど久しく、淋さびしい月日を旅の境遇に送り得たのも、つまりはやみがたい芸術の憧あこがれ憬というよりも、苦しいこの問題の解決がつかなかったためです。外国ですと身体からだに故障のない限りは決して飢えるという恐れがありません。料理屋の給仕人でも商店の売児うりこでも、新聞の広告をたよりに名譽を捨すて鉢ばちの身の上は、何でも出来ません。「紳士」という偽善の体面を持たぬ方が、第一に世を欺あざむくという心に疚やましい事がなく、社会の真相を覗うかがい、人生の誠の涙に触れる機会もまた多い。しかし一度ひとたび生れた故郷へ帰っては——生れた土地ほど狭苦しい処はな

い——まさかに其処そこまでは周囲の事情が許さず、自分の身もまたそれほどいさぎよ潔く虚栄心から超越してしまう事が出来ない。私は濃霧の海上に漂う船のように何一つ前途の方針、将来の計画もなしに、低いひらた平い板屋根と怪物のように屈曲ひねくれた真黒な松の木が立っている神戸の港へ着きました。事によれば知人の多い東京へは行かず、この辺へ足を留とどめ、身を隠そうかとも思っていた。その矢先混雑する船梯子ふなぼしごを上って、底力のある感激の一声——

「兄さん。御無事で。」といって私の前に現れた人がある。大学の制服をつけた私の弟でした。この両三年は殊ことさら更に音信も絶えがちになつていたので、故郷の父親は大層心配して、汽船会社に聞合し、自分の乗込んだ船を知り、弟を迎いに差向さしむけたという次

第が分りました。

私は覚え^ず顔を隠したいほど恐縮しました。同時に私はもう親の慈愛には飽^{あき}々^{あき}としたような心持もしました。親は何故^{なぜ}不孝なその児^こを打捨ててしまわないのでしょうか。児は何故^{なにゆえ}に親に対する感謝の念に迫^せめられるのでしょうか。無理にも感謝せまいと思うと、何故^{なぜ}それが我ながら苦しく空恐ろしく感じられるのでしょうか。ああ、人間が血族の関係ほど重苦しく、不快^{きわま}極^まるものはない。親友にしる恋人にしる、妻にしる、その関係は、如何^{いか}に余儀なくとも、堅くとも、苦しくとも、それは自己が一度意識^{ひとたび}して結んだものです。しかるに親兄弟の関係ばかりは先天的にどんな事をしても断ち得ないものです。断ち得たにしても堪えがたい良心の苦痛が残

ります。実に因果です。フアタリテです。閣下よ。人の家の軒に巢を造る雀すずめを御覧なさい。雀の子は巢を飛び立つと同時に、この悪運命の蔭かげからすっかり離れてしまいます。その親もまた道德の縄で子雀の心を繋つなごうとは思っていないらしい。

私は一目弟の顔を見ると、同じ血から生れて、自分と能よく似ているその顔を見ると、何ともいえない残酷な感激に迫せめられます。いわれぬ懐なつかしい感情と共にこの年とし月の放浪の悲しみと喜びと、凡すべての活いきいき々とした自由な感情は名残もなく消えてしまったやうな気がしました。身のまわりの空気は忽たちまち話に聞く中世紀の修モ道院ナステールの中もかくやとばかり、氷の如く冷ひやかに鏡の如く透明に沈静したように思われました。

弟はいいいます——兄さん、六時の汽車が急行です、切符を買いましょう。

私は何とも答えませんでした。私は神戸のステーションで、品格のないしかし肉付にくづきのいい若いアメリカの女が二、三人、花売りから花束を買っているのを見ただけです。私はその翌日の朝新しん橋はしに着き人力車じんりきしゃで市ヶ谷監獄署の裏手なる父の邸宅へ送り込まれました。

その夜よ、家いえではいささかの酒宴さけうが催もられました。父は今年六十。たとえ事情は何であっても、表おもてむき向むかは家いえの嫡ちやくし子こという体面たいめんを重おもずるためでしょう。私をば東坡書随大小真行皆有※と書いた私には読めない掛物を掛けた床とこの間まの前に坐らせ、向むかい合あつては父

と母。私の右には母の実家さとを相続して、教会の牧師になっている二番目の弟、左には、私を出迎でむかえに来た末の弟が制服の金ボタンいかめしく坐りました。父は少し口髯くちひげが白くなつたばかりで、銅あかがねのような顔色はますます輝き、頑丈な身体からだは年と共に若返つて行くように見えました。母は私の留守に十年二十年も、一時に老おいこ込んでしまいました。小く萎ちいさびた見るかげもないお婆ばあさんになつてしまいました。

私は敢あえて妻や恋人ばかりではない。母親をも永久に若い美しい花やかな人を持つていたのです。私は老おいこ込んだ母の様子を見ると、實際はし箸を取る気もなくなりました。悲しいとか情ないとかいうよりも最もつと強い混乱した感情に打うたれます。不朽でない人間

の運命に対する烈しい反抗をも覚えます。

閣下よ。私の母は私が西洋に行く前までは実に若い人でした。

さほどに懇意でない人は必ず私の母をば姉であろうと訊いた位でした。江戸の生れで大の芝居好き、長唄が上手で琴もよく弾き

ました。三十歳を半ば越しても、六本の高調子で「吾妻八景」

の——松葉かんざし、うたすじの、道の石ふみ、露ふみわけて、

ふくむ矢立の、すみイだ河……

という処などを楽々歌ったものでした。それでいて、十代の娘時

分から、赤いものが大嫌いだったそうで、土用の虫干の時にも、

私は柿色の三升格子や千鳥に浪を染めた友禅の外、何一つ花

々しい長襦袢など見た事はなかった。私は忘れません、母に連

れられ、乳母うばに抱かれ、久松座ひさまつぎ、新富座しんとみぎ、千歳座ちとせざなどの棧敷さじきで、鰻飯うなぎめしの重詰じゅうづめを物珍しく食べた事、冬の日おきこたつの置炬燵おきこたつで、母が買集めた彦三ひこさや田之助たのすけの錦絵にしきえを繰り広げ、過ぎ去った時代の芸術談を聞いた事。しかし凡てすべの物を破壊してしまう。「時間」ほど酷いむごものはない。閣下よ。私は母親といつまでもいつまでも、楽しく面白く華美はで一ぱいに暮りたいのです。私は母のためならば、如何どんな寒い日にも、竹屋たけやの渡しを渡つて、江戸名物の桜餅くらもちを買つて来ましょう。

*

*

*

*

私はどうしても、昔から人間の守るべきものと定められた教おしえに服する事が出来ません。教は余りに酷むごく余りに冷つめたい。私はどうか

して、教に服するよりも、「教」と「私」とが暖かに滑かに一致して行くようにならぬものかと、幾度いくたび願ねがい、悶もたえ、苦しみましたろう。絶望した私は遂いさぎよに潔いさぎよく天罰応報と相あい争いい、相あい対峙たいじしようと思おもうようになってしまいました。私の父は厳格な人です。勤勉な人です。悪を憎む事の激しい人です。父は私が帰朝の翌日静かに将来の方針を質問されました。如何いかにして男子一個の名誉を保ち、国民の義務を全うすべきかという問題です。

語学の教師になろうか。いや。私は到底心に安んじて、きょうべ教鞭けんを把とる事は出来ない。フランス語ならば、私よりもフランス人の方が更よに能よくフランス語を知っている。

新聞記者になろうか。いや、私は事によったら盗とうぞく賊ぞくになるか

も知れない。しかし不幸にしてまだ私は正義と人道とを商品に取扱うほど悪徳に馴なれていない。私はもし社会が『万朝報』よろずちようほうや『二六新聞』にろくによつて矯正きようせいされるならば、その矯正された社会は、矯正されざる社会よりも更に暗黒なものとなるのである。うという事を余りに心配している。

雑誌記者となろうか。いや。私は自ら立つて世に叫ぼうとするほど社会の発達人類の幸福のために夜よの目も眠らず心配しているのではない。私は親おや子こ相あ啣いはみ兄けい妹まい相あ姦いする獣類の生活をも少しも傷いたましくまた少しも厭いとわしく思っていない。

芸術家となろうか。いや、日本は日本にして西洋ではなかつた。これは日本の社会が要求せぬばかりかむしろ迷惑とするものであ

る。国家が脅迫教育を設けて、われわれに開かいびやく闢やく以来大和民族が発音した事のない、T、V、D、F、なぞから成る怪異な言語を強しい、もしこれを口にし得ずんば明治の社会に生存の資格なきまでに至らしめたのは、けだし他日われわれに何々式水雷とか鉄砲とかを発明させようがためであつて、決してヴェルレーヌやマラルメの詩などを読ませるためではない。いわんや革命の歌マルセイエーズや軍隊解放の歌アンテルナショナルを称となえしめるためではなお更ない。われらにまことしてもし誠の心の底から、ミューズやヴェヌスの神に身を捧げる覚悟ならば、われらは立ハルプ琴いを抱いだくに先立おきてつて掟おきてきびしいわれらが祖国を去るに如しくはない。これ国家のためにもまた芸術のためにも、双方の利益便利であろう。

あわれやこの世の中に私の余命を支えてくれる職業は一つもない。私は寧ろいっちまた巷にさまよつて車でも引こうか。いや、私は余りに責任を重おもじている。客を載せて走る間、私は果はたして完全にその職責を尽つくす事が出来るだろうか。下男となつて飯を焚たこうか。無数の米粒の中に、もしや見えざる石の片かけが混つていて、主人が胃を破りその生命を危くするような事がありはせまいか。人間もし正確細微の意識を有する限りは、如何いかなる賤いやしい職業をも自ら進んで為なし得べきものではない。それには是非とも飢えて凍こえて正確な意識の魔酔が必要である。自我の利欲に目の眩くらむ必要がある。少くとも古来より聖賢の教えた道ないがしろを蔑にする必要がある。生活難を謳うたえる人よ。私は諸君が羨うらやましい。

私のは父に向つて世の中に何にもする事はない。狂人きちがいか不具かたわも者と思つて、世間らしい望みを囁してくれぬようにと答えました。

父もまた新聞屋だの書記だの小使だのと、つまらん職業に我が児この名前を出されてはかえつて一家の名誉いへいに関する。家には幸い空間あきまもある食物もある。黙つて、おとなしく引込ひっこんでいてくれと話を極きめられました。

*

*

*

*

私は半年ばかり毎日ぼんやり庭を眺めて日を送っています。

八月の暑い日の光が広庭一面の青い苔こけの上に繁しげつた樹木のかげを投なげています。真ま黒くろな木の葉の影の間々に、強い日光が風の

来る時斑々まばらまばらに揺れ動くのが如何いかにも美しい。蟬せみが鳴く。鴉からすが啼なく。しかし世間は炎暑なつにつかれて夜半よなかのように寂しんとしています。忽こっぜん然ぜん夕立が来ます。空の大半は青く晴れている処あたから四辺あたりは明あかるいので、太い雨の糸がはつきり見えます。芭蕉ばしやう、芙蓉ふよう、萩はぎ、野菊ぎく、撫子なでしこ、楓かえでの枝。雨に打たれる種いろいろ々な植物は、それぞれその枝や莖の強弱に従あつて或あるものは地に伏し或ものはかえつて高く反そり返ります。またその葉の厚さ薄さに従あつて、あるいは重くあるいは軽くさまざまの音を響かせます。この夕立の大合奏サンフォニーは轟とどろき渡る雷いかずちの大太鼓おおだいこに、強く高まるクレツサンドの調子すさま凄まじく、やがて優しい青蛙あおがえるの笛ふえのモデラトにその来きたる時と同じよう忽こっぜん然ぜんとして搔消かきけすように止やんでしまいます。すると庭中は空そらに聳そびゆ

高い梢こずえから石の間に匍はう熊笹くまざさの葉末まで一斉に水晶たまの珠を連
 ね、驚くばかりに光沢つやをます青苔の上には雲かと思う木立の影が
 長く斜ななめに移り行き、日暮ひぐらしの声と共に夕暮が来ます。風鈴ふうりんの音
 は頻しきりに動いて座敷の岐阜提灯ぎふぢようちんに灯ひがつくと、門外の往來おうらいに
 は花やかな軽い下駄げたの音、女の子の笑う声、書生の詩吟やハーモ
 ニカが聞こえ、何処どこか遠い処で花火のような響ひびきもします。新内しんない
 が流して行きます。夜よが次第にふける……

枕まくらに就ついて眠ろうとすると、雨戸の外なる庭一面縁の下まで恐
 しいほどに虫が鳴き立っています。凡おほそ何万匹の昆虫が如何いかなる力に
 支配され何を感じてかくも一時に声を合せて、私の身のまわりに
 叫ぶのでしよう。私はふと限りもない空の下雄した大なる平原の面に

唯だ一人永遠の夜明けを待ちつつ野宿しているような気がして、閉とぎしたまぶた瞼を開いて見ると、今にも落ちて来そうな低い天井と、色かざりも飾もない壁と襖ふすまとが、机の上の燈とも火しびに照らされて薄暗く狭苦しく私の身体からだを囲っているのです。限られた日本の生活の深味のない事がしみじみ感じられます。突然屋根の上にはらッばらッと破れた琴を弾ひくような雨の雫しずくの落ちる音。樹木に夜風の吹きそよぐ響こが聞えます。しかしその響は幽谷に獅子ししの吠ほえるような底深いものではないので、私は熱帯の平原を流れる大河たいがのほとりに、葦あしの葉の戦そよぎを聞くのかと思つた事がありました。虫は絶えず鳴いています。夜よるがあけても昼が来ても鳴き続けるのです。虫ばかりではない。雨も毎日々々降りつづくようになりました。

何という湿気しつげの多い気候でしょう。障子を閉めきり火鉢ひばちに火を入れて見ても着ている着物までが濡ぬれるようなので、私は魚介ぎょかいのように皮膚うろこに鱗うろこが生えはしないかと思うほどです。亜米利加アメリカを去る時ロザリンが別れの形見にくれた『フランシスカ伯爵夫人の日記』という、立派な羊の皮の表装は見るかげもなく黴かびてしまいました。巴里パリの舞踏場でイボンと踊うった漆うるしの塗靴ぬりぐつは化物のようよこたに白い毛をふき、ブーロンユの公園の草の上にヘレーネと横よこたわった夏外套なつがいとうも無惨な斑点しみを生じた。

物売りの声裏悲しく、彼方あなたこなた此方に人の雨戸を繰る音が聞えて夜よるが来ると、ああ日本の夜の暗い事はとても言葉にはいい尽つくせません。死よりも墓よりも暗く冷く、淋さびしい。如何なる憤怒絶望やいばの刃

を以てするも劈つんぎきがたく、如何なる怨えん恨こん悪念の焰を以てするも破りがたい闇やみの墻しょう壁へきとでもいいましようか。私はたつた一つ広い座敷の真まん中なかについている暗いランプの笠かさの下に楽しい月日に取りやりした彼あの人たちの手紙を読み返して……読み尽し得ずしてその上に顔を押当てて泣き伏します。庭一面あい相も変らぬ虫の声……

しかし私はやがてこの暗い夜、この悲しい夜の一夜いちやごとに、鳴きしきる虫の叫びの次第に力なく弱つて行くのを知りました。私はいつか裕あわせの上に新しい綿わた入たい羽織ればおりを着ています。新しい呉服ごふくも物の染そめい糸いとの匂においが妙に胸悪く鼻につきます。雨はもう降りません。朝夕ひややの冷かさに引換えて、日の照る昼過ぎは恐しいほど暑い。

木の葉は俄にわかに黄ばんで風のないにはらはらと苔こけの上に落ちるの
 をば、この夏らしい烈はげしい日の光に眺めやると、私はいかにも不
 思議で不思議でならないような心持がします。「このあたり木の
 葉は散る春の四月」と仏蘭西フランスの或詩人あるが南亜米利加みなみアメリカの氣候を歌つ
 たそのような幽愁あじわいの味深い心持がします。読みさしの詩集なぞ手
 にしたまま、午ひるすぎ後庭うえごみに出て植込の間を歩くと、差込さしこむ日の光
 は梅かえでや楓かきなぞの重り合つた木の葉をば一枚々々照すばかりか、苔こ
けむ蒸す土の上にそれらの影をば模様のように描いています。この影
 の奥深くに四阿屋あずまやがある。腰をかけると、後は遮うしろさへぎるものもない花は
なばたけ畠はたけなので、広々と澄み渡つた青空が一目ひとめに打仰うちあおがれる。西
 から東へと、この広い大空を白い薄雲が刷毛はけでなすつたように流

れていました。いつまで眺めていても少しも動かない。無数の蜻蛉とんぼが丁度フランスの夏の空に高く飛ぶ燕つばめのように飛交とびちがっている。畠くまざさは熊笹くまざさ茂る垣根際ぎわまで一面の烈はげしい日の光に照らされ、屋根よりも高いコスモスが様々の色に咲き乱れている。葉鶏頭はげいとうの紅が燃え立つよう。桔梗ききようや紫苑しおんの紫はなお鮮あざやかなのに、早くも盛りを過すこした白萩しろはぎは泣き伏す女の乱れた髪のように四阿屋しやあやの敷しきがわら瓦わらの上に流るる如く倒れている。生き残った虫の鳴音なくねが露あせ深いその蔭かげに糸よりも細く聞えます。

ああ忘られた夏の形見。この青空この光。どうしてこれが十月。これが秋だと思えましょう。膝ひざの上なる詩集の頁は風なき風ひるがえに翻ひるがえつてボードレールの悲しい「秋の歌」、

[Ah! Laissez-moi, mon front posé sur vos genoux,]

[GouYter, en regrettant l'e'te' blanc et torride,]

[De l'arrie`re saison le rayon jaune et doux!]

「ああ、君が膝にわが額を押当てて暑くして白き夏の昔を嘆き、
軟かにして黄き晩秋の光を味わしめよ。」という末節の文字が明
かに読まれます。

私は何に限らず、例えば美しく咲く花を見れば、これ散り萎む
時の哀れさを思わせるために咲いているのではないかと思う。楽
しい恋の酔い心地は別れた後の悲しみを味わしめるためとしか思
われませぬ。秋の日光は明日来る冬の悲しさを思知れとて、か
ように麗しく輝いているのでしよう。私は妙に心も急き立つて一

分一秒も長く、薄れ行く日の光を見たいと思つて、その頃は庭のみならず折々は門を出で家の近くをも散歩に出掛けました。あわれ秋の日。故郷の秋の日は如何なる景色を私に紹介しましたらう……

*

*

*

*

手紙の初めにも申上げたよう私の家は市ヶ谷監獄署の裏手で御在ざいます。五、六年前私が旅立する時分じぶんにはこの辺は極ごくく閑静な田舎でした。下町したまちの姉さんたちは躑躅つづじの花の咲く村と説明されて、初めてああそうですかと合点がてんする位でしたが、今ではすっかり場末の新開町しんかいまちになつてしまいました。変りのないのは狭い往来をそびえた立たつ長い監獄署の土手と、その下の貧しい場末の

町の生活とです。

私の門前には先ず見るも汚らしく雨に曝さらされた獄吏の屋敷の板塀が長くつづいて、それから例の恐しい土手はいつも狭い往来いじゆうを日蔭ひかげにして、なおその上に鼬いたちさえも潜くぐれぬような茨いばらの垣が鋭い棘とげを広げています。土手には一ぱい触さわれば手足も脹れ痛む鬼おに薊あざみが茂っています。

私は以前二百十日の頃には折々立続くこの獄吏の家の板塀が暴あ風らしで吹倒ふきたおされる。すると往来には近所の樹木の吹折られた枝が無惨に落ち散っているその翌日の朝、きつと円い竹の皮の笠かさを冠かむり襟えりに番号をつけた柿色かきいろの筒袖つつそでを着、二人ずつ鎖で腰つなを繋つながれた懲役人が、制服佩剣はいけんの獄吏に指揮されつつ吹倒された板塀

をば引起し修繕しているのを見たものです。夏の盛りの折々に
はやはり一隊の囚人が土手の悪草を刈っている事もありました。
それをば通行の人々が気味悪そうな目付をしながらしかもまた物
珍しそうに立止つて見ていました。

土手はやがて左右から奥深く曲り込んで柱の太い黒い洩塗りの
門が見えます。その扉はいつでも重そうに堅く閉ざれていて、細
い烟出しが一本ひよろりと立っている低い瓦屋根と、四、五本の
瘦せた杉の木立の望まれる外には、門内には何一つ外から見える
ものはない。聞える声もない。私の目には杉の木がかくも淋しく
別れ別れに立っているのは、獄舎の庭では夜陰に無情の樹木まで
が互に悪事の計画を囁きはせぬかと疑われるので、此くは別々

に遠ざけ距へだてられているのであろうというように見えてなりません。

高い土手が尽きると、狭い往来は急に迂曲うきよくした坂になり、片側は私の知らぬ間まにいつか金持らしい紳士の新宅になって石垣が高く築かれています。その向いの片側は昔から少しも変りのない貸長屋で、下おり行く坂道に従って長屋は一軒々々箱を並べたように重かさなっています。後うしろは一面監獄署の土手に遮さえぎられているのでこの長屋には日の光のさした事がない。土台はもう腐くって苔こけが生え、格子戸こうしどの外に昼は並べた雨戸の裾すそは虫が食って穴をあけている。いつでもその中うちの二、三軒には、拙つたない文字で貸家札ふだの張られていない事はない。内職の札の下したっていない事はない。私は以前よ

くこの長屋の前を通る時、寒い冬の夕方なぞ、薄暗い小窓の破れ障子に、中なるランプの灯が後毛を乱した女の帯なぞ締め直している薄い影をば映し出しているのを見た事があります。蒸暑い夏の夜には、疎な窓の簾を越してこういう人たちの家庭の秘密をすつかり一目に見透してしまふ事がありました。今でも多分変りはあるまい。私は折々この貸長屋の窓下をば監獄署から流し出す懲役人の使った風呂の水が、何ともいえぬ悪臭と気味悪い湯氣を立てながら下水の溝から溢れ出していた事を記憶している。しかし驚くべきはこの辺に住んでいる女房たちで、寒い日にはそれをば頻と便利がつて、腫物だらけの赤児を背負い汚い齒を出して無駄口をききながら物を洗っている。また夏中は遠慮もなく臭い

水をば往来へ撒まいていたものです。

さて坂を下り尽つくすと両側に居並ぶ駄菓子屋荒物屋煙草屋八百屋たばこやおや薪屋まさやなぞいずれも見すばらしい小売店こうりみせの間に米屋と醤油屋だけは、柱の太い昔風の家いえがまえ構まが何となく憎々しく見え、漠ぼくとした反抗心を起させます——といつてそれは社会主義なぞいう近代的の感想ではない。家構が古い形だけに、児雷也じらいやとか鼠小僧ねずみこぞうとか旧劇で見る義賊のような空想に過ぎない。この辺に不思議なのは二軒ほども古い石屋の店のある事で、近頃になって目について増え出したのは天麩羅てんぷらの仕出屋しだしやと魚屋とである。これは日を追うて建て込んで行く貸屋のために界限かいわいが開けて来た証しょうこ拠こであろう。青苔の薄気味わるく生えた板の上、油で濁った半はん台だいの水の中に、

さまざまの魚類の死骸しがいや切りそいだその肉片、串くしぎしにした日干
 しの貝類を並べて、一つ一つに値段を書いた付木つけぎや剥そぎ板いたをぼそ
 の間にさしてあるが、何いずれを見ても、一ひと片きれ十じ銭せん以上のほに上よつて
 いるものは甚だ少い。見渡す処、死んだ魚の眼の色は濁り淀よどみそ
 の鱗うろこは青白く褪あせてしまい、切身きりみの血の色は光沢つやもなく冷切ひえつて
 いるので、店頭の色彩が不快なばかりか如何いかにも貧弱なまぢに見えます。
 西洋の肉売る店の前を過ぎて見るから恐おそしい真赤まっかな生血なまぢの滴したたりに
 胆きもを消した私は、全くその反対、この冷い色のさめた魚肉が多数
 の国民の血を養う唯一の原料であるのかと思うと、一種いわれぬ
 悲愁ひしゆを感じずにはおられません。ましてや夕方近くなると、坂下
 の曲まがり角かどに頬ほ冠かむりをした爺おやじが露店ろてんを出して魚の骨ほらと腸わたばかり

を並べ、さアさア鯛たいの腸わたが安い、鯛の腸が安い、と皺しわ枯がれ声ごえで怒ど鳴なる。そのまわりには、児こを負おぶつた例の女房共が群集して大声に値段を争う。

大空は砂で白くなつた瓦屋根かわらの上に、秋の末の事ですから、夕ゆ陽うひの名残が赤いというよりもむしろ不快な褐色はげに烈はげしく燃え立っているので、狭い往来の物の影はその反対に夜よるの闇やみよりもなお強く黒く見えます。勤め先からの帰りと覚しい人通りにわが俄しげかに繁しげくなつて、その中にはちよつとした風采みなりの紳士もある。馬に乗つた軍人もある。人力車じんりきしゃも通る。しかし両側の人家ではまだ灯とも一つとも点ともさぬので、人通りは真ま黒くろな影の動くばかり、その間をば棒ぼうち片ぎれなぞ持つて悪戯いたずら盛さかりの子供が目まぐるしく遊びまわつてい

る。私は勤^{つとめ}歸^{がえ}りの洋服姿がどうかすると路^{みち}傍^{ばた}の腸^{わたう}売^りの前
 に立止り、竹^{たけ}皮^{かわ}包^{づつみ}を下げて、坂道^{さかみち}をば監獄署の裏通りの方
 へ上^{あが}つて行くのを見ました。それが何という訳^{わけ}もなく、貧しい日
 本の家庭の晩^{ばん}餐^{さん}の有様^{ようさま}を聯^{れん}想^{そう}せしめます……。

借家の格子戸^{こうしど}がガタガタいつて容易^{やす}に開^あかない。切張^{きりば}りをした

鼠^{ねずみ}色^{いろ}の障子^{しょうじ}にはまだランプの火も見えない。上^{あがり}框^{がまち}は真^まつ

暗^{くら}だ。洋服の先生はかつて磨いた事もないゴム靴^{くつ}を脱^{ぬぎ}捨^{すて}て障

子^こを開^{ひら}けて這^{はい}入^いると、三疊敷^{さんじょうしき}の窓の下で、身^{からだ}体のきかない老婆^{らうば}が

咳^{せき}をしている。赤^{あか}児^ごがギヤアギヤア泣^ないている。細^こ君^{きみ}は夜になつ

てから初めて驚^{おど}き、台所^{だいじょ}の板^{いた}の間に蛙^{かえる}の如^{ごと}くしゃがんで、今^{いま}しも

狼^{あわて}狽^ててランプへ油^{あぶら}をついでいる最^{さい}中^{ちゆう}。夫^{おつと}の帰^{かえ}つた物音^{ものね}に引^ひ窓

からさすゆうやみ夕闇の光に色のない顔をこなた此方に振向け、あぶらけう油氣失せた
ひさしがみ庇髪おくれげの後毛をぼうぼうさせ、寒くもないのにみずばな水鼻をすす啜つ
 て、ぼんやりした声で、お帰んなさい——。

すると、夫は返事の代りに、今頃ランプの掃除をするのかと、
 家事の不始末不経済を攻撃する。老母が夜具の中からは匍い出して
 何かと横よこぐち口を入れる。夫、妻、いづれの方へ味方をしても同じ
 事、一場の争論に花が咲く。其処そこへ七なな、八やツになる子供が喧嘩けんかを
 して溝どぶへ落ちたとやら、衣服きものを溝どぶ泥だらけにして泣きわめきな
 がら帰つて来る。小言こごがその方へ移る。やつとの事で薄暗いラン
 プの下に、煮豆こに、香かう物もの、葱ねぎと魚の骨を煮込んだお菜さいが並べ
 られ、指の跡のついた飯櫃おほちが出る。一閑張いっかんばりの机を取巻いて家族

が取交す晚餐の談話というのは、今日の昼過ぎ何処その叔父さん
 さんが来てこの春の母が病気の薬代くすりだいをどういったとか、実家さとの
 父が免職になったとか、それから続いて日常の家計談になる。家
 族の口はまるで飯を食うのと生活難を方針なく嘆き続けるために
 しか出来ていない。貧しくとも、貧しからずとも、つまり同じ事
 でしょう。こういう人たちには純粹な談話の趣味という事は解釈
 されないのです。言語すなわは乃ち、相談と不平と繰くり言ごとと争論と、こ
 れより外ほかには全く必要がないのです。

*

*

*

*

秋の光を味あじわおうと散歩するわが家の門前、監獄署の裏通りはこ
 んな有様でした。なおこの上にも私の心を痛いほどに引締めるの

は、時々坂道の真まん中なかで演やぜられる動物虐待の悲劇です。遠路とおみち
 を瘦やせう馬まに曳ひかした荷車にりようが二輛も三輛も引続いて或時あるときは米俵
 或時は材木煉瓦れんがなど、重い荷物を坂道の頂きなる監獄署の裏門内うち
 へと運び入れる。ところが意地悪く門前の広場は坂から続いて同
 じような傾斜をなし、湿った柔い地面に車輪が食込んでしまうの
 で、馬は疲つかれて到底とても一息には曳込む事が出来ない。それをば無
 理無体に荒くれた馬子まご供どもが叱咤しつたの声激しく落ちた棒片ぼうぎれで容捨くつわもな
 く打ち叩たたく、馬は激しく手綱たづなを引立てられ、轡くつわの痛みに堪えられ
 ぬらしく、白い齒を嚙かみ、鬣たてがみを逆立て、物もの凄すさまじく眼を血走ら
 せて遂にはがつくり砂利の上に前足を折って倒れてしまう事も度
 々です。狭い坂道は無論この騒ぎで往来止めとなり、通行人の大

概は驚くどころか面白半分口を開いて見えています。私は今日まで日本の社会に動物虐待の事件が、単に一部のキリストきようしや基督教者の間に止つて、一日半時はんときとても猶予ゆうよすべからざる国民一般の余儀ない問題にならない、この証拠を目撃して悲しみましようか喜びましようか。私は唯だ日本人は将来においても確かに最もう一度ロシアを征伐する事の出来る戦乱の民であるという感を深くするだけです。御安心なさい。愛国の諸君よ。黄人こうじんの私をして白人の黄こうか禍論ろんを信ぜしめる間は、君らは須すべからく妻を叱咤しったし子を虐しいたげ太白たいはくを挙げてしかして帝国万歳を三呼さんこなさい。われらが叫ぶ、新らしき幽愁の詩人が理想の声を心配するには時代がまだ余りに早過ぎましよう。

私は次第々々に門の外へ出る事を厭いとい恐れるようになりました。
 ああ私はやはり縁側の硝子戸ガラスドから、独り静しずかに移り行く秋の日光ひかげを
 眺めていましょう。

秋は早や暮れて行きます。かの夏かと思う昼過ぎの烈はげしい日の
 光はすっかり衰えて、空はどんよりといつでも曇っています。そ
 れは丁度広い画室の磨硝子すりガラスの天井でも見るよう。浮雲の引幕ひきまく
 から屈折して落ちて来る薄うす明あかるい光線は黄昏たそがれの如く軟やわらかいので、
 眩まぼゆく照り輝く日の光では見る事味あじわう事の出来ない物の陰影かげと物の
 色彩いろまでが、かえって鮮明に見透みとおされるように思われます。木の
 葉は何時いつか知らぬ間に散ってしまつて、梢こずえはからりと明あかるく、細い
 黒い枝が幾いくすじ条となく空の光の中に高く突立つたっている。後の黒い

ときわぎ
常磐木の間からは四阿屋の藁屋根と花はな 畠はなばたけに枯れ死した秋草の
黄色きばみが際立きわだつて見えます。縁先の置おきいし石いしのかげには黄金色こがねいろの小
菊が星のように咲き出しました。その辺からずっと向うまで何なんに
も植えてない広い庭の土には一面の青苔が夏よりも光沢つやよく天鷲ビロ
絨ウドの敷物を敷いている。二、三匹の鶴せきい 鶴いがその上をば長い尖とがつ
た尾を振りながら苔の花を喙つばみつつ歩いている。鼠ねずみ 色いろしたそ
の羽の色と石の上に買った盆栽の槭はぜの紅葉こうようとが如何あざやに鮮かに一
面の光沢つやある苔の青さに対照するでしょう。

風は少しもありません。行く秋の曇った午過ぎひるすは物の輪廓を没
して、色彩ばかり浮立つ幻覚に唯だどんよりと静まり返っている
のです。しかし折々落ち残った木の葉が、忽こっぜん 然として一度には

らはらと落ちます。思い掛けないこの空気の動揺は、さながら怪人の太い吐息を漏もすがよう。すると常磐木の繁しげり、石の間なる菊くさむらの叢くさむらまで、庭中のありとあらゆる草そう木もくの葉は、何とも言えぬ悲愁の響を伝えますが、直すぐとまたもとの静寂に立返つて、滑なめかな苔の上には再び下り来る鶺鴒の羽の色、菊の花、盆栽の紅こう葉よう。ああ、夢の光、行く秋の薄曇り。

閣下よ。私は昨日からヴェルレーヌが獄中吟『サツジエス』を讀んでおります。

おゝ、神よ、神は愛を以てわれを傷付け給へり。その瑕きず開ききていまだ癒いえず。

おゝ、神よ、神は愛を以てわれを傷付け給へり。……

閣下よ。冬の来ぬ中^{うち}是非一度、おいで下さい。私は淋しい……。

明治四十一年一二月稿

青空文庫情報

底本：「雨瀟瀟・雪解 他七篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年10月16日第1刷発行

1991（平成3）年8月5日第6刷発行

底本の親本：「荷風小説 二」岩波書店

1986（昭和61）年6月9日

初出：「早稲田文学」

1909（明治42）年3月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：入江幹夫

校正：酒井裕二

2018年5月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

監獄署の裏

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>